

## ありがとう運動

2021. 2. 26

今から20年以上前のアメリカでの話である。当時のニューヨーク市長がタクシー会社に呼びかけて、「ありがとう運動」をスタートさせた。

タクシードライバーがお客さんを乗せるときに気持ちのいい挨拶をして、降ろすときには笑顔とともに、感謝の気持ちを込めて「ありがとう」と言葉をかけるという実にシンプルな運動である。

しかし、このシンプルな運動によって人々の心が荒廃していたニューヨークの街は少しずつ変わり始める。おそらくドライバーもお客さんも明るい気持ちになり、その気持ちが家族へ、職場の仲間へと伝播していったのであろう。このような実話から人間は皆、深いところでつながっていることがわかる。

私たちは幸せと聞くと、何か大きなことをイメージしがちである。大きな家に住んだり、海外旅行をしたり、おいしい料理を食したりと、それはそれで幸せなことかもしれない。しかし、自分や家族の幸せを求めるだけではときに空虚感を伴うことはないだろうか。むしろ、たとえ小さいことであったとしても誰かのために何かを尽くすとき、そこに心からの喜びと幸福を感じ取るのが人間なのではなかろうか。

一人ひとりの人間は小さくて弱く無力な存在かもしれない。だが、自分では気づかないだけで、いまこうして生きているのは多くの人たちの助けによるものであり、同時に自分もまた知らないうちに誰かの役に立っている。深いつながりの中で、お互いに生かし、生かされている。これが人間の本質なのではなかろうか。

外の世界に向けていた目を足元に移せば、そこには無限の幸せが満ちていることに気がつくかもしれない。東日本大震災、毎年のように繰り返される自然災害、そしてコロナ禍のせいだろうか、以前よりも「幸せ」について考えるようになってきた。歳をとってきたせいかもしれない。

昔は、幸せについて考えることなど滅多になかった。考える余裕もなかった。それが今では“当たり前”がどれほど幸せでありがたいことか考えるようになった。それほど、当たり前が失われている時代であると言える。

日本人は、このコロナ禍にあって、行政のリーダーからのメッセージを受け止め、礼節を重んじ行動することができる。ニューヨーク市長のありがとう運動ではないが、もし、日本のリーダーたちが、偏見や差別などに対し、もっと明確で強いメッセージを送ったとしたらどうなるのであろうか。「〇〇運動」でもよい。

あるいは、日本人の場合、言わなくてもできるし、やってくれるだろうという期待値が高いのであろうか。残念ながら偏見と差別に関しては、あまり期待しない方がよいのが実状であろう。日本でも一度「〇〇運動」を見てみたい。きっと、日本人の美德に光が当てられるはずである。